

全体報告会・ディスカッション



橋爪 紳也 大阪市立大学大学院助教授

(プロフィール)大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学専攻助教授。1960年大阪市生まれ。1984年京都大学工学部卒業。1990年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。京都精華大学助教授、大阪市立大学文学部助教授を経て、2001年より現職。近代日本における都市開発思想の変遷、都市計画理念の歴史、ディスプレイデザインの技術史的考察等を研究テーマとする。主な著者は「海遊都市 アーバンリゾートの近代」、「なにわの新名所」、「日本の遊園地」、「モダン都市の誕生」、「集客都市」、「にっぽん 電化史」、「あったかもしれない日本」等多数。

コーディネーター	橋爪 紳也	大阪市立大学大学院助教授
パネリスト	横山 葵	NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長
〃	大谷 新太郎	阪南大学助教授
〃	嘉名 光市	大阪市立大学大学院講師
〃	田端 和彦	兵庫大学助教授
〃	藤本 貴也	国土交通省近畿地方整備局長

(順不同・敬称略)

橋爪 会場の皆様方にも長時間発表会に御参加頂きましてお疲れ様ですが、最後の元気を振り絞って、全体報告会を行いたいと思います。各テーマに分かれ、第一分科会から第四分科会まで地域づくりの発表がありました。各分科会のコメントーターの先生方に各発表の報告とそれらをまとめたコメントをお聞きしたいと思います。

横山 第一分科会は、「未知普請・地域協働」をテーマにした6事例の発表でした。『日本一汚い川からのまちづくり』は、日本一汚いといわれている近木川を、子ども達と一緒にいろんな活動をしていくと地域もどんどん元気になっていくといった事例でした。『加古川流域129支流の水質浄化プロジェクト』は、水質浄化に炭を利用するものですが、エコ炭銀行という銀行を設立して地域で取り組みを行い、それがどんどん広がり元気の素になっているという事例でした。『未知なる挑戦 競争から共創のまちづくりへアドプト・ロードE S A K A』は、地下鉄江坂駅の南改札口開設運動が基になり活動が次から次へと活発化し、行政との関わりの中でより活動が促進しているとの事例でした。『紀南のみち・まちづくり』は、道路の清掃・緑化についてボランティア・サポート・プログラムを通して地域と行政がどのように関わっているかという話、さらに魅力ある地域をめざしてシーニックバイウェイを進めていくという事例でした。『人とメダカの元気な里地づくり』は、越前市の白山地区はメダカをはじめたくさんの貴重種が確認され、それを守っていこうという取り組みで、地域の住民が中心となりいろいろな協働体制がまちづくりに役立っているという事例でした。

『大阪湾ダイビングスポット創造プロジェクト』は、子どもと一緒に環境改善に



役立つアマモの育成からいろいろな交流が生まれて活動が活発化したという事例でした。

6つの発表を通して、いろいろなフィールドで、いろんな活動が初期の段階ではなく、次の段階に入っていることが感じられました。特に印象的に感じたのは、地域の方々の活動だけでなく、既に行政との協働の取り組みがうまく滑り出して、地域と行政が同じ目線でやりとりができる環境が出来つつあるということです。一人一人が元気になっていき、それが繋がりをもって地域全体が元気になるということを感じることができました。

大谷 第二分科会は、「観光・歴史・文化」をテーマにした6事例の発表でした。『世界遺産を活用した蘇りの地域づくり』は、世界遺産登録後に急増した観光客の問題点に対処しようという取り組みです。特に熊野健康村構想での熊野古道の癒し・健康効果を検証する取り組みが興味深かったです。『三国湊の魅力づくり』は、地域の観光資源は単体では弱い但有機的に結びつけば効果があるということで、ここでは、町中散歩と様々な体験メニューを結びつけています。商品開発でも地域資源を生かした三国ブランドをめざしているという事例でした。『コウノトリ再び大空へ』は、人里にコウノトリを戻すというのがポイントです。自然に戻すのではなく人里に戻すことが結局は住民にとっても良い環境を作ることにつながるという事例でした。『地域が支える祭「なら燈花会」』は、期間中のべ20万個のろうそくを使い、来訪者は60万人とのこと。さらに、印象的なのは3割の市外の人を含め3千人のボランティアが協力しており、多くの人に関わっているイベントの成功事例でした。『ほんまもん体験のすすめ』は、体験型で特に一次産業にこだわった観光資源を作っているとのことでした。観光の目的は地域づくりであり、元気なまちを体験してもらうことが観光資源になるという指摘でした。『源氏物語のまちづくり』は、行政の取り組みとしてはハード整備ではなくソフトから入ったことが他地域との違いです。お茶と世界文化遺産に源氏物語というソフトを持ち込み様々な観光資源を有機的に結びつけた事例でした。

全体で共通した感想を述べるのは少し難しいのですが、やはり地域の人々が住んでいるということ、そこと観光との関わり合いで、これまではどちらかという観



光で訪れる人と地域の人々が全くかけ離れた存在であったことが、今では地域の人々が積極的に動いて活動し元気な地域を盛り上げ、観光資源と繋がって活動していることが強く感じられました。

嘉名 第三分科会は「都市再生」をテーマにした6事例の発表でした。『六甲道駅北地区のまちづくり』は、地区の7割が被害にあった六甲道駅北地区での震災復興土地区画整理事業の話です。地域の骨格となる公園や幹線道路の位置は行政が決め、身近な生活道路等は住民との話し合いにより、柔軟にまちづくりを考えていく、2段階の都市計画の事例でした。『舟運による水都大阪の再生』は、天神祭の時だけでなく一年を通じて舟を使い、都心を回る水辺のループを生かして都市の活性化につなげていく事例でした。『黒壁長浜、多様な主体が街を変える』は、長浜の黒壁は失敗しなかった数少ない第3セクターとして有名です。黒壁という取り組みからスタートして、「まちづくり役場」や「プラチナプラザ」などいろいろな取り組みが派生して、常に進化・発展している事例でした。『川の賑わいをまちの賑わいに』は、大阪を代表する繁華街である道頓堀の活性化のために、まち全体をテーマパークと見立てて、いろいろな取り組みをネットワークさせていく事例で、道頓堀川沿いの遊歩道を利用した「とんぼりリバークルーズ」は、試行が大好評で3月から本格開始する予定です。『歴史的都心地区でのまちなか再生』は、京都の姉小路でマンションの建設反対運動がきっかけとなり、それが様々な住民主導のまちづくり活動に広がり、イベントの開催、建築協定の締結、町屋の改修という取り組みに発展していったという事例でした。『御堂筋を人間のためのにぎわいとゆとりの舞台へ』は、今まで御堂筋では社会実験としてオープンカフェやお祭りをしてきたものを、今年はそれをさらに発展させて11月に御堂筋オープンフェスタとして開催したものです。今までの積み重ねの中で、警察や道路管理者の協力を得ながらどんどん活動を広げてきた事例でした。

全体としましては、地域に何か核となるものがありました。六甲道の震災復興、長浜の黒壁、舟運と天神祭、道頓堀の繁華街、姉小路、御堂筋などブランドや伝統みたいな重要なものを種にしなが、共同でまちづくりを進めている、あるいはまちに対するプライドが失われることの危機感をバネに、地域の活性化への連帯感が生まれているところが印象的でした。



田端 第四分科会は「中心市街地の活性化」をテーマにした6事例の発表でした。まとめとしては、「歴史・文化」と「どんな人がどのように行ったか」という視点に絞ります。『“煌めく風 堺” 大小路界隈の創造的活性化に向けて』は、歴史的文化的遺産である開口神社の再生を中心とし、活動を商店街の活性化や町並み保全に広げている事例です。会員は148名と大変多く、住民や地元商店街をはじめ大手企業も参画していることが特徴です。『赤煉瓦のまち舞鶴』は、海軍のまち舞鶴には歴史的、文化的に価値のある赤煉瓦の建物が多く、これらを生かしてまちをどう活性するかということでジャズ祭やライトアップに取り組んでいます。建物は必ずしも公有ではなく民有のものもあり、これをどう巻き込んでいくかが大事です。『奈良町の保全と再生』は、都市計画道路がまちを分断することを苦慮した若者の活動が、最初は、地元からは理解が得られず、また行政からも反対運動として見られていましたが、地道な活動を続けた結果、景観形成地区の指定にまで至った事例でした。『地域資産を活かしたまちづくり・ひとづくり』は、京都の伏見でタウンマネジメント組織(TMO)が、うまく地域住民を巻き込んでいった事例です。活動で特に大事なことは、地域の良さを知り、地域のスピードで実行する人がいるかどうかとのことでした。『空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト』は、「まずやる人は誰なのか、何ができるか」からまちづくりをはじめており、また、活動主体はNPOではなくボランティアということが興味深かったです。ここはアートでのまちづくりを目指しており、河合長官にもぜひともお聞かせしたかった事例でした。『座・大津』は、楽市楽座の座を使ったネーミングが近江商人の文化的香りを効かせています。行政が中心となり地域住民をうまく盛り上げて活動している事例です。

それぞれ共通するところとして、文化とか歴史をうまく使っているということと、まちづくりを担う人たち、そしてどのような地域づくりを行うのかに、特徴があることを認識させられました。

藤本 貴也 近畿地方整備局長



(プロフィール) 国土交通省近畿地方整備局長。
大阪府出身。1949年生まれ。1972年東京大学工学部土木工学科卒業後、旧建設省に入省。関東地方建設局企画部長、道路局国道課長、総合政策局技術調査官などを経て、2004年7月より現職。京奈和自動車道をはじめとする高規格幹線道路網等の整備促進や、国際物流拠点港として「大阪・神戸港」のスーパー中核港湾の整備推進など、近畿活性化のための効率的かつ重点的な社会資本整備に意欲を見せる。また、「橋洗い」など市民と一緒にになった地域づくりや、関西の元気なプロジェクト・地域・人の情報を全国に発信する「関西元気宣言」発信運動を推進している。

橋爪 コメンテーターの先生方、感想有り難うございました。

最近、関西という地域名、エリア名称とよく組み合わせて使われる言葉に、一つには「文化」、一つには「元気」だと思います。「関西元気文化圏」では、文化力というキーワードで東京、全国にアピールする。また、関西元気宣言発起人の会からは「元気UP! 関西」というリーフレットを東京や横浜など首都圏の空港や駅にかなりの冊数で置かれ、うまく情報発信がなされています。関西元気宣言運動の仕掛け人でもあります藤本局長に元気な関西について伺いたいと思います。

藤本 「関西元気宣言発信運動本部」主催の発表会に大勢の方の参加を頂き有り難うございます。関西を元気にするためには、まず行政が自分の責任を果たし、また地域の方もこれをしっかりと受け止めて頂くことが大事だと思っています。河合先生のお話の中で「昔の人間関係は近すぎる、一方最近のマンションのような人間関係は希薄すぎる」という意味で、今回の地域づくりの取り組みは新しいコミュニティ形成の一つのスタイルになるのではないのでしょうか。

最近の関西を見ていますと、いろんな経済指標でも元気になっていることがわかります。
<説明資料 P160～P161 参照>

大阪市内でも梅田周辺、中之島、なんば等でも、いろいろな具体的なプロジェクトも動き、都市部だけでなく地方部でも元気の芽が出ています。こうした芽を育て、地域づくりに定着させていくために、近畿地方整備局はそのお手伝いをしていく役目を有しております。関西の情報発信は、これからも続けていかなければなりません。情報の中身が最も重要となります。中身については、先程24団体から報告がありましたが、要はいかに地域の自然・歴史・文化に根ざしたオンリーワンのものを発見し、発展させ、発信していくか、アイデンティティーのあるものを発信していくかが重要であります。

これからの地域おこしは、住む人、働く人、訪れる人がうまく咬み合い持続して活動していくことが重要です。もちろん主体となるのは地域の人たちです。時代の変化に柔軟に対応できるような組織体制にしていくことが必要です。この24事例の成功例が10年後どうなっているのかが、次の課題となります。

橋爪 ありがとうございました。最後に、全体報告と藤本局長からのお話から得た印象について御発言をお願いします。

横山 行政と地域の歯車が噛み合いうまく回り始めたような印象です。さらに、どんどん進化していくことで、元気になるという相乗効果が出てきました。これで「関西はもういけるで」とう感じを受けました。

大谷 すべての発表について、どれも観光に絡んでくることがわかりました。地域が頑張っている姿そのものが、観光資源や観光対象となることを改めて認識させられました。国立大学にも観光学部ができる時代となりました。国のほうでも観光立国というものを掲げて頂きましたし、観光というものの時代的な変化を学生に伝えながら、観光に携わっていける人材を育てていくことの重要性を改めて考えさせられました。

嘉名 まちづくりに対する住民や大学の関わりが密接になってきました。こうした新たな動きに対応して、今後は都市計画自体が再定義しなければならない時代に来ているのではないかなという印象です。

田端 東京が目指す新しい公のあり方が民間企業型の規制緩和というのであれば、関西は、市民力による活性化あるいは市民力による規制緩和を考えていこうではないかといった、たくさんのヒントを本日頂いた感じがします。

藤本 関西は、美しい瀬戸内海など良好な自然を有していますが、はげ山と化したところもあり、これまで自然破壊がなされてきました。しかし、淡路島では見事に緑を復元しました。そのような所もたくさんあり「自然の再生」を世界に発信できないだろうか、私もいろんな人々に声をかけています。

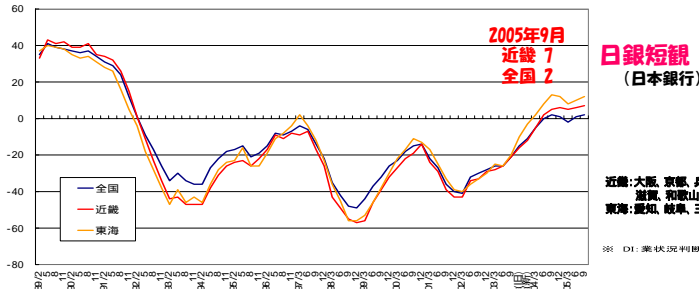
また、関西は、日本を代表する「祭」がたくさんあります。この祭を上手く繋ぎ活用しながら世界に発信できるような取り組みがあれば人を惹きつける大きな材料になると思います。

< 説明資料 P162 ~ P163 参照 >

橋爪 「関西元気宣言」はプライドの回復運動でもあると考えます。先生方から頂きました言葉の中に大事なキーワードとして、「自信」「プライド」、関西地域の「核」や「歴史」「文化」がありました。また本日来場の皆様方は、自信に満ちていて互いに元気を与えることが出来る方が集まりました。かなり短い期間10年20年で「関西らしい」元気な地域ができるものと期待しております。「関西はいけるで」が今日の結論ではないかと思えます。

最後まで御清聴ありがとうございました。

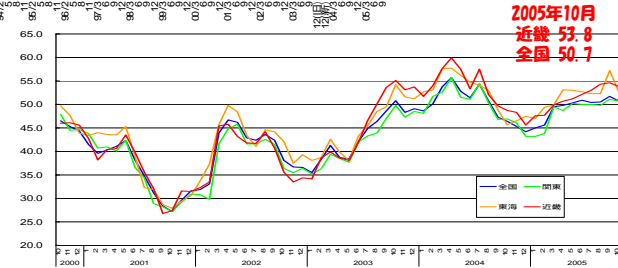
元気な関西 企業の景況感の推移



景気ウォッチャー調査 (内閣府)

近畿: 大阪, 京都, 兵庫, 奈良, 滋賀, 和歌山
東海: 愛知, 岐阜, 三重
関東: 茨城, 栃木, 群馬, 山梨, 長野, 埼玉, 千葉, 東京, 神奈川

○景気ウォッチャー調査: 内閣府が実感を伴った景気の動向を素早くつかむため始めた調査。全国で委託を受けた2050人が景気指数を判断。



元気な関西 活気づく神戸「震災復興10年」

神戸



みんなで創る 美しいまちなみ

- 神戸市松本地区では、震災復興に際し、まちづくり協議会を結成。
- 「せせらぎ歩道」の設置や、無電柱化、沿道建築物の高さ制限など、景観に配慮したまちづくりを実施。

震災から10年 神戸から復興発信!

- 阪神・淡路大震災10年を機に、神戸では復興した街の様子を発信する取り組みが進む。



(平成16年11月25日神戸新聞掲載記事)

元気な関西 活気づく大阪「中之島・御堂筋」

中之島



- 中之島新線は、2008年度の完成を目指す。
- 国立国際美術館は2004年オープン
- 朝日放送の新社屋兼スタジオや、分譲住宅、商業施設、多目的ホール等が順次建設される。



阪大病院跡地の整備イメージ

船場を、自分たちの手で、元気で魅力あふれる街にしよう!

御堂筋(船場)



- NPO法人「長堀21世紀の会」他が御堂筋オープンフェスタ運営に参画。
- 船場で活動している様々なグループが集まり、「せんばGENKIの会」を結成。
- 船場をより「魅力的な街」にするための企画を提案・実施。



元気な関西 活気づく世界遺産地域

世界遺産を活用した地域の活性化

「紀伊山地の霊場と参詣道」

世界遺産登録による観光入込客数の増加は約220万人

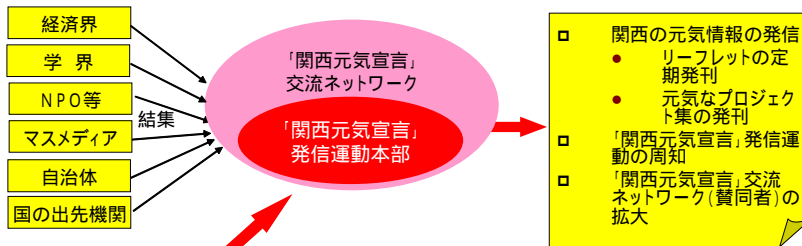
平成16年7月1日 世界遺産登録

主要観光地の客数

年	熊野本宮温泉郷	中辺路町	熊滝温泉等	白浜温泉等
H5	1.0	1.0	1.0	1.0
H8	1.1	1.1	1.0	1.0
H11	1.4	1.8	1.0	1.0
H14	1.1	1.1	0.8	1.0
H16	2.4	2.4	0.8	1.0

関西元気宣言 「関西元気宣言」発信運動

—産学公民等が連携し、関西の元気を地域内外に発信—



発起人の会
(河合文化庁長官をはじめ産・学・官・民29団体)



関西元気宣言 関西元気情報の発信

リーフレット「元気UP! 関西」

- ・関西の魅力を月2回、合計70,000部発信
- ・成田国際空港や羽田空港、東京駅などの主要駅など関東エリアで約14,000部発信



プロジェクト集「未来 関西元気地図」

- ・関西で建設中のプロジェクトを紹介したプロジェクト集
- ・書店で好評発売中



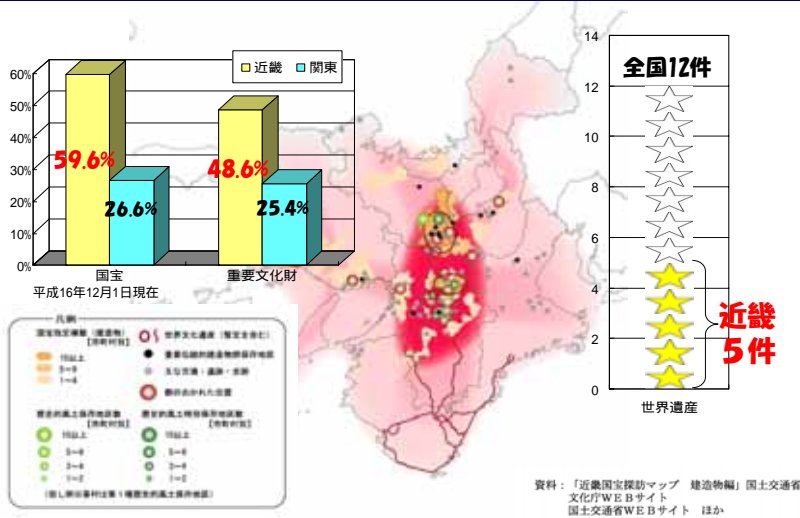
「関西元気宣言」発信運動のホームページの開設

- ・ホームページを開設して魅力ある関西の情報を広く発信



www.kansaigenki.jp

関西の魅力と関西の地域づくりの特徴
歴史文化資産の集積



関西の魅力と関西の地域づくりの特徴
民間人が支えた大阪のまち



大阪城

1928年、大阪市長・関一が大阪城復興のための寄付を呼びかけたところ、財閥・住友家の25万円をトップに一市民の10銭まで、折からの不況にもかかわらず、総額150万円（現在の約75億円）にもものぼる寄付がよせられた。



淀屋橋

江戸時代において、大坂にあった約200の橋のうち、「公儀橋」はわずか12橋で、民衆の力で社会資本の整備が行われた。

近代に入っても、「大阪市中央公会堂」（岩本栄之助）・「大阪府立中央図書館」（住友吉左衛門）・「綿業会館」（岡常夫）等が民衆の力で建設された。

世界に向けて発信
瀬戸内地区の再生と創造「美しく豊かな瀬戸内」

自然環境



本四架橋の景観



ドイツの有名な地理学者、リヒトホーフエン(1833～1905)は1860年に瀬戸内海に立ち寄り、その美しさを次のように旅行記に託して世界に発信した。

本四架橋も周辺の自然と調和し、良好な景観を創出している。

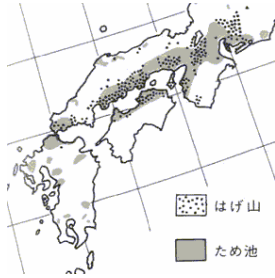
「広い区域に互る優美な景色で、これ以上のものは世界の何処にもないであらう。将来この地方は、世界で最も魅力のある場所のひとつとして高い評価を勝ち得、沢山の人を引き寄せるであらう。(中略) かくも長い間保たれて来たこの状態が今後も長く続かんことを私は祈る。」

本州四国連絡高速道路(株)のホームページ

世界に向けて発信

瀬戸内地区の再生と創造「自然環境」

はげ山の分布



花崗岩は風化すると「まさ土」になり、「まさ土」から生成される土壌は貧栄養である。また、「まさ土」化した地表では斜面崩壊なども他の地質に比べ頻発する。

したがって、花崗岩の分布域は、山火事、伐採野斜面崩壊で植生が失われると、植生の回復がされにくく、「はげ山」が多い。

戦時中の山火事や近世以降明治初期にかけては燃料や肥料等に使用するために乱採取され、大部分が裸地化していった。



明治中期の六甲山

土取りが行われた結果、灘山は姿を消し、跡地には草木が存在しない岩盤が露出した。



1973年の灘山

世界に向けて発信

瀬戸内地区の再生と創造「灘山地区の再生」

岩盤緑化工法により、緑が回復した土取り場跡地

植樹した苗木は高さ2~3mになり、緑が回復してきた。



2001年の灘山の状況

関西の文化の創造 「伝統を華やかに受け継ぐ祭」

祇園祭 (7月)



八坂神社を中心に、京都の市中で繰り広げられる日本三大祭りの一つ。京都の情緒と熱気あふれる夏の風物詩として、全国的に知られている。

時代祭 (10月22日)



明宗維新から延暦時代までの7つの時代をさかのぼり、風俗・文物の変遷を再現する祭りで京都三大祭りの一つ。

葵祭 (5月15日)



京都三大祭の一つで、国内最も優雅で古趣に富んだ祭りといわれる。平安期の文物・風俗を忠実に再現した行列が京都御所から下鴨神社を経て、上賀茂神社へ向かって歩く。

岸和田だんじり祭 (9・10月)



1703年、岸和田藩主・岡部長泰公が、米や麦、豆など5つの穀物がたくさん取れるように祈願した稲荷祭が始まりといわれる。

天神祭 (7月24・25日)



学問の神様・菅原道真公を祭っている大阪天満宮の大祭。日本三大祭の一つで、水の都・大阪の夏を代表する祭り。

灘のけんか祭 (10月中旬)



姫路市白浜町の松原八幡神社で行われる秋期祭りで、神が乗り移った3基のみこしを荒々しくぶつけ合う独特の神事で、全国の「けんか祭り」の中でも最大規模と言われる。